

発表題目：「シェリング『自由論』の現象学的解釈 ―ハイデガーはなぜ「無底」を回避したか」

氏名 多田圭介

所属 北海道大学文学部非常勤講師・専門研究員

#### 発表要旨

ハイデガーの1936年夏学期講義『シェリング『人間的自由の本質について』』(以下『シェリング講義』と略記する)は、ほぼ逐文にわたって註解が施されるという入念さからシェリング研究においても相当な頻度で引用されている。しかし、ハイデガーの『シェリング講義』は、その精密な註解にもかかわらず、シェリングのテキストにおいて「探究の最高点」(7,406)とされた「無底」を迂回(大橋良介「理性 ―あるいはシェリングの「無底」の射程」『ドイツ観念論を学ぶ人のために』、世界思想社、2006年、133頁)するという代償をはらってまで「実存と根底の区別」が一つをなす「円環(Zirkel)」(7,358)に定位する。なぜハイデガーは「無底」を回避したのか、そこにはいかなる哲学的洞察が存するのか、シェリングとハイデガーの思考の内在的な次元からその意義を考察することが本発表の目的である。

本発表では、まず、一見すると忠実な註解にも見える『シェリング講義』の進行において、「無底」へと議論が進む手前の「悪の現実性」が問題化する箇所はこの回答があることを明らかにする。具体的には、ハイデガーは「悪の現実性」を解明する箇所でシェリングの『自由論』が有する二つの柱の一方を切り捨て、議論をハイデガー自身の存在論に手繰り寄せているのである。その二つの柱とは、「悪の現実性」と「弁神論」である。悪の現実性を確保しつつも同時に神の善性を擁護するシェリングの議論に対して、ハイデガーはこの二つの柱の一方である「弁神論」そのものを切り捨てているのである。弁神論を切断したことによって、必然的に、神の啓示の最終段階に「神が一切中一切」となる「愛」(7,405)も語ることはできなくなる。結果「無底」はハイデガーの視界から消え去ることになるのである。ではハイデガーは「無底」における「愛」に結実する「神の善性」を丸ごと回避することによって、何を語ろうとしたのか。ハイデガーは「実存と根底の区別」における「神のうちなる自然」に、ある神性を思惟することは認めている。しかし、「端的に見られた絶対者」(7,407)はいかなる意味でも認めていないのである。ここにはハイデガーの終世一貫していた神認識が見えている。『シェリング講義』の「無底」の回避という事態をハイデガーの神認識の立場の究明という観点から検討することを試みたい。

ハイデガーが「無底」を軽視しているということは従来何度も指摘されてきた。しかし、『シェリング講義』の議論そのものからその意義を明らかにすることによって、この講義がシェリング研究においてもあたかも内在的研究であるかのように参照されている現状の問題点も見えてくるだろう。本発表は現象学研究のみならず、ドイツ観念論研究にも一石を投じる研究になるよう努める。